『西南アジア研究』No. 23, 1984

ベンジャミン・フォスターの アッカド期行政・経済文書研究

前　川　和　也

イェール大学のベンジャミン・フォスター Benjamin R. Foster によって，前24世紀中葉からはじまるアッカド期（＝サルゴン期）行政・経済楔形文書の研究が急速に進展しつつある。

前代（＝プレ・サルゴン期：前24世紀前半）のラガシュ=ギルス文書研究，後代（＝ウル第三王朝時代：ca. 2100－2000 B.C.）の行政・経済文書の研究にくらべて，アッカド時代記録の研究は，これまでいちじるしくたちおくれていた。その理由としては，(1)アッカド期文書の絶対年代が，文書自体からはただちに明らかではないこと，(2)テキストが出土した遺跡もばあいによっては不明確であったこと，(3)同一都市から出土したと判断できるテキストの絶対数はギルスのばあいをのぞき、さほど多くないこと（しかもギルス文書の多くは未公刊であった），(4)そのばあいでも，テキスト相互の連関性がとぼしいこと，(5)かなりの文書はさほど長大ではなく，文書自体が示す内容がかなり断片的であること、などをあげることができるであろう。

今次大戦後ではゲルプ Ignace J. Gelb がおおくのサルゴン期テキストを公刊したし（たとえば MAD 1，4，5 など），またさいきんではヴェステンホルツ Aage J. Westenholz がニップール出土文書を公刊しつつある（*Old Sumerian and Old Akkadian Texts in Philadelphia chiefly from Nippur*, Part 1，*Bibliotheca Mesopotamica* 1，1975；*Early Cuneiform Texts in Jena*, 1975）。けれども，前述した諸制約のため，かれらはアッカド期メソポタミア社会の内的構造を本格的に論じるまでにはいたっていない。またランベール Maurice Lambert はアッカド期テキストの出版をおこなわなかったかわりに，この時期についてのいくつかの論考を書いた。けれども基本的にはかれの論考は，個々のテキストのコメントを集成したにとどまっている。アッカド期行政・経済文書にかんして，ゲルプ，ランベールらをふくめ諸研究者によってもっともしばしば論じられたテーマが，いわゆる "mu–iti" 文書の年代比定であったことも，この時期の文書研究の

困難性をよく示している。これにたいして，プレ・サルゴン期の約1800枚のラガシュ=ギルス文書は，わずか20年間に書かれたものであって，しかも文書の内容はすこぶる精密なものである。シュメール社会にかんする古典学説（シュメール「神殿経済」、「神殿都市」論）も，この文書の研究の結果成立したのであるし，またこの文書にもとづいて本格的なプロソポグラフィーをおこなうことも可能である。またウル第三王朝時代のシュメール諸都市遺跡からは，全3千年におよぶ古代メソポタミア全史のなかでもっとも多数の行政・経済文書が出土しており，これらはメソポタミア社会の復元のために今後ますます多くの研究者によって利用されるであろう。

さて，前述のような諸制約を有するアッカド期文書にかんして，フォスターの研究はいかなる点で積極的に評価できるであろうか。この時代にかんするかれの最近の書物・論考は次のとおりである。(1) *Umma in the Sargonic Period* (*Memoirs of the Connecticut Academy of Arts & Sciences* 20), 1982 ; (2) *Administration and Use of Institutional Land in Sargonic Sumer* (*Mesopotamia, Copenhagen Studies in Assyriology* 9), 1982 ; (3) Veysel Donbaz and Benjamin R. Foster, *Sargonic Texts from Telloh in the Istanbul Archaeological Museum* (*Occasional Publications of the Bobylonian Funds* 5), 1982 ; (4) "Commercial activity in Sargonic Mesopotamia," *Iraq* 39, 1977, pp. 31－43 ; (5) "New light on the "mu–iti" texts," *OrNS* 48, 1979, pp. 153－162 ; (6) "Notes on Sargonic royal progress," *Journal of the Ancient Near Eastern Society of Colombia University*, 12, 1980, pp. 29－42 ; (7) "'Land of Both Types' at Sargonic Umma," *ASJ* 2, 1980, pp. 225－226 ; (8) "Sargonic and pre–Sargonic tablets in the John Rylands University Library," *Bulletin of the John Rylands University Library of Manchester* 64, 1982, pp. 457－480 ; (9) "Notes on Sargonic legal and juridical procedures," *Welt des Orients* 13, 1982, pp. 15－24 ; (10) "Education of a bureaucrat in Sargonic Sumer," *AO* 50, 1982, pp. 238－241 ; (11) "An agricultural archive from Sargonic Akkad," *ASJ* 4, 1982, pp. 7－51 ; (12) "Administration of state land at Sargonic Gasur," *Oriens Antiquus* 20, 1982, pp. 39－48 ; (13) "Archives and record–keeping in Sargonic Mesopotamia," *ZA* 72, 1982, pp. 1－27 ; (14) "Ethnicity and onomastics in Sargonic Mesopotamia," *OrNS* 51, 1982, pp. 297－354. なお主題がアッカド期メソポタミアの行政・経済文書と直接的には連関しない論考としては，(15) "A new look at the Sumerian temple state," *JESHO* 24, 1981, pp. 225－241 ; (16) "Ebla and the origins of Akkadian accountability," *Bilbiotheca Orientalis* 60, 1983, pp. 298－305 がある。

フォスターは，かれのイェール大学博士論文の研究素材としてウンマ出土文書を選んだ。ウンマ出土文書の総数はギルス文書ほど多くはないけれど，かなりの未刊文書をイェール大学が有していたこと，文書成立年代によってウンマ文書がいくつかに分類できるらしいこと，またいわゆる“mu–iti”文書について，すでに研究の蓄積があったこと，などがウンマ文書を研究対象として選んだ理由であったろう。1975年に提出された博士論文は，その後手を加えられて，1982年に公刊された(1)。なおすでに1979年には，“mu–iti”文書にかんする部分が単一論文として発表されている(5)。

さてウンマ文書はすべて盗掘によって出土したものであり，そのため文書は世界各地の大学・博物館に散在している。したがって，個々の文書がどのような経路で世界各地に流れたかを調べることも，文書の系統「文書群」（archive）の性格、文書の成立年代などを決定するうえで重要な意味をもつ。フォスターは各地のウンマ文書を徹底的に調べあげるとともに，他都市出土文書についても，同様な調査をおこなっている。論文(13)の一部は，われわれが利用しうるアッカド期文書についてのもっとも詳細な文献目録として，今後とも参照されつづけるであろう。

そしてかれは，これまで未公刊であった文書を手写し，発表している。そのうちもっとも重要なテキスト出版は，(1)〔ウンマ文書〕，(3)〔ギルス文書〕によっておこなわれた。

いっぽうフォスターは，サルゴン期諸文書群の相互比較を主要な研究課題としはじめた。イェール大学はウンマ文書の他に，ウンマにごく近い地点から出土したと思われる一群の文書（いわゆる Me–ság 文書）を所蔵しており，この文書はしばしばウンマ出土文書と誤解されてきたことも，フォスターがサルゴン期文書群の相互比較をくわだてた理由のひとつであったろう〔Me–ság 文書はブリッジス S.J. Bridges の博士論文において考究された（未公刊）〕。とりわけ(2)は，各地の土地文書をもとにして，アッカド王朝（ないしはその地方総督）による土地経営のパターンが，シュメール各地においてどのように共通し，またどのように異なっていたかをさぐろうとした，すこぶる大胆な試みである。

フォスターの諸研究のなかでもっとも重要な業績は，いうまでもなくウンマ文書の考究であろう。とりわけ特筆すべきは，タブレットの形状，特定のスクリプトの特徴などから，計500枚近いウンマ文書を3分類し（A : the early mu–iti archive ; B : the Ur–Šara archive ; C : the later mu–iti archives），これらを時代的に配列できたことであ

ろう。たとえばA文書群ではプレ・サンゴン時代に確証されるシュメール語動詞接頭辞 e– が圧倒的に多く用いられているのにたいし，C文書群ではすべて ì– があらわれる。フォスターによれば，A文書群は第2代王 Rimuš 時代のウンマの知事（ensí）Ennalum の公的ハウスホールド（é–gal）文書であり，またBは Ur–Šara なる人物（およびその妻 Ama–e）を中心とするグループが国家の委託を受けておこなった私的経済活動の記録（family archive）であり，おそらく第4代王 Naram–Sin 時代に属するという。これにたいし，おそらく5代王 Šarkališarri 時代に成立したCグループの一部は é–ùr（油関係文書）より出土したらしいけれども，他は é–gidri を中核とするウンマの行政・経済活動の記録であるという。

文書成立の年，月，日にかんして独特の記録法を採用しているウンマ・テキスト（“mu–iti” テキスト）の絶対年代について，これまでさまざまな見解が採用されてきた。たとえばこれらがポスト・アッカド期（グティウム期）に成立したという見解さえみることができる（Gelb, *Materials for the Assyrian Dictionary,* Vol. 4, p. x ; Hallo, *Reallexikon der Assyriologie,* Bd. 3, p. 713)。これにたいしフォスターは，“mu–iti” テキストはA. B. C 3グループすべてにみられ，“mu–iti” 記録法の存在自体は年代決定には役に立たないことを，最終的に証明したのであった。

フォスターのウンマ文書研究には，すこぶるユニークな，しかしまだ多くの問題を含む見解が随所にみられる。たとえばA文書群にはサブム Sabum なる地点で大規模な建設活動がおこなわれたことを示唆するテキストがあるが，かれはこれらを，Rimuš 王がウンマなどの反乱を鎮圧したとする碑文 Rimuš b5と大胆に連結する。すなわち，反乱鎮圧ののちウンマに割当てられた強制労働が，A文書内の Sabum 労働関係テキストに記されているというのである。

フォスターは，Bグループ文書は，Ur–Šara およびその妻 Ama–e の “family archive” であるとし，文書はもともとかれらのハウスホールド（é）で書かれたと考えた。家畜飼養における Ur–Šara の活動はめざましいものであり，たしかにわれわれは，メソポタミア史上もっとも古い “family archive” を見出しているのかもしれない。これはフォスターのウンマ研究のなかでも重要な貢献とみなしてよいだろう。ただしこれらの文書が，Ur–Šara やAma–e によって国家とかかわったかたちでおこなわれた私的経済活動を記したものであるのかどうかは，いまだに疑念がのこる。フォスターによれば，Ama–e にたいし国家（ないし地方知事）が保有を許した土地が，さらに借地人によって耕作されたという。そして文書群の穀物関係文書のおおくは，Ama–e にたいする小

作料納入の記録であるというのであるが，これを積極的に立証するテキストは見あたらないようにおもわれる。

さて，フォスターのウンマ文書研究(1)は，けっして読みやすいものではない。すでにふれたように，アッカド期テキストの多くは断片的，かつ小記録であり，しかも関連テキスト数はさほど多くはないため，フォスターは，個々のテキストの微細な分析，テキスト内の章句についての諸コメントを，文書群についての一般論と交錯させて記述するという手法を採用した。これが読者の側のスムースな読解を妨たげているのである。

かれのウンマ文書研究(1)は，たしかに，章，節，分節といった構成法において，工夫がなさすぎるから，これを改善することによってある程度は読みやすい書になったはずである。けれども，個々のテキストについての具体的かつ微細な議論を本書中心部から除去することは，おそらく不可能であろう。もしも同形式の行政・経済文書が多数存在し，しかも文書内容が計量的に処理できるのであれば，個別テキストについての論議ときりはなして一般論を書き進めることは，よほど容易になる。このような操作は，ウル第3王朝時代のある種の文書群について可能である。けれども，アッカド期の文書は，計量的な処理をおこなうには，あまりに多くの限界を含むといわざるをえない。じっさいフォスターは，ウンマC文書群の一部についてこのような操作をおこなっているが，有意義な結論は得られていない。にもかかわらず，かれはこの手法を，シュメール地方出土のすべてのアッカド期土地文書にじつに安易に適用した(2)。その結果(2)は，その方法，結論において多くの深刻な欠陥を含んでしまった。

(2)はギルス，Me-ság，ウンマ，アダブ，ニップールなどから出土した200枚近い土地文書の分析結果である。このなかでフォスターは，国家（ないし地方知事）より土地保有を認められたひとたちを，(1a)administrative and court staff ; (1b)labor and supervisory personnel ; (2) professional people ; (3) cultic personnel ; (4) people without title に分け，それぞれの平均土地保有面積を計算している。そしてこれらの数字が，各都市における土地保有制度の特質を示すものとして，結論部においても用いられている。

これはまったく無暴な企てであろう。まず第1に，かれの分類規準自体，意味をもたない。たとえば，かれは(3)“cultic personnel”を，「神殿」組織と同義にみなす傾向があるが，(1)，(2)と同じ職名のひとたちが「神殿」で働いていたからこそ，メソポタミア史における「神殿」についての深刻な論争が存在しているのである。フォスターは，プレ・サルゴン期ラガシュ文書が「神殿」文書ではないとするにあたって，“cultic”と分

類できるひとたちが，ほとんど土地文書にあらわれないことを，他論文で強調したが(15)，これは無意味な論議であろう。また(1)，(2)のひとたちの区別についても，すこぶる問題が多い。(2)“professional people”の概念があいまいであるからである。

「神殿」に所属するひとたちと，世俗的な「王宮」その他の大組織で働いているひとたちに2大別するか，階層的な分類規準を設けるかのいずれかをおこなうべきなのであろう。そしてメソポタミア行政・経済文書にあらわれる職名のみからでは，このような分類がほとんど不可能である故にこそ，これまでの研究者は苦しんできたのである。フォスターはこの問題をいとも手軽にとびこえてしまった。

アッカド期土地文書が真に計量的な操作に耐ええないことは，もはやここでは詳述しない。われわれは，成立年も同一かどうか疑わしい3テキスト，計7事例から，ギルス=ラガシュ“cultic personnel”についての平均土地保有面積を算出し（p. 21），論議してはならないであろう（7事例中には“cultic”と規定できるか疑わしいケースも含まれる）。

楔形行政・経済文書の研究はつねに，研究対象としている文書群が示す内容の限界性について，深刻な認識をもっておらなければならないし，また文書内容に応じた研究方法も採用しなければならない。フォスターのように，アッカド期文書に安易な統計的処理をほどこしてはならない。いっぽう，かれの研究は，ウル第三王朝期の土地制度のおおくの特質がアッカド期に淵源をもっていることを示唆している（たとえば，「直営地」の基礎耕作単位）。そしてウル第三王朝期の土地文書は無数に存在しているのであるから，おそらくアッカド期土地文書はウル第三王朝時代テキストとの広汎な比較をおこなうことによって，はじめて深く理解できるのであろう。ところがこれは，フォスターがほとんど無視したアプローチであった。